「なすべきは神の栄光のため」
使徒言行録 12:18－25

今日の箇所では、当時のユダヤの王であったヘロデに焦点が当てられています。ヘロデの生き方は、決して変わることのない主の愛に支えられて生きたペトロや教会の人々とは対照的でした。「定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は、『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。」（21～22 節）。

この出来事については、ヨセフスの『ユダヤ古代誌』にも詳しく記されています。それによると、この「定められた日」に、ヘロデはローマ皇帝を祝うためにカイサリアの円形劇場で大きな式典を開催しました。このときヘロデは、銀の糸で織られた衣装を着て式典に現れ、人々に向かって演説を始めました。すると、朝日に照らされたヘロデの服は、光を反射して神々しい輝きを放ったのです。それを見ていた人々は、口々に“ヘロデ王は人間ではなく、神に等しい方だ”と褒め称えたと言うのです。ヘロデはこの人々の言葉を制止したり、咎めることをしませんでした。

以前、同じカイサリアの地で、人々からひれ伏され、礼拝されそうになった人がいました。使徒ペトロです。彼はその時、「お立ちください。私もただの人間です」と言って、それをしようとしていたコルネリウスたちを止めたのです。これが、主の愛によって支えられて生きているペトロと、神を信じることなく生きるヘロデの違いです。神さまの愛を信じて生きる者は、自分の誉れではなく、主の栄光を喜ぶ者となります。自分が賞賛されるのではなく、こんな私を用いてくださる神さまを誉れとするのです。

ヘロデの生涯は、自分を神として、自分に栄光を帰す生き方でした。人々の好意を自分のものとするために費やした人生でした。ですから、ヘロデは、ローマ皇帝の好意を獲得してユダヤの王としての地位を手に入れ、その上で自分に対するユダヤ人たちの好意を得るために教会を迫害し、ヤコブを殺し、ペトロを投獄したのです。

そのヘロデの最後を聖書はこう記しています。「するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。」（23 節）。

ヘロデはこの後、激しい腹痛を訴え始め、五日間悶え苦しんだ上で死んでしまったそうです。聖書はその理由を、ヘロデが「神に栄光を帰さなかったからである」と明快に述べています。ヘロデが裁かれたのは、自分を神と等しい者とし、神さまの受けるべき栄光を自分が受けようとした罪です。

まことの神を恐れず、自分を神とし、自分中心に生きること。そこから、すべての罪が生まれてきます。神さまの御心を第一にするのではなく、自分の欲望を満たすことを第一としてしまう。人間の罪は、すべてそこから始まっています。人類最初の罪もそうでした。アダムとエバが楽園を追われたのは、禁じられた木の実を食べたからです。その時、二人を誘惑したサタンは、これを食べると神のようになれると言って誘いました。それで、神さまのようになりたいと思った二人は、その言葉に負けてしまったのです。人間は、その歴史の初めから、神のようになろうとする罪を犯し続けています。そして、その結果、神さまの裁きに遭うという失敗を繰り返してきたのです。

けれども、神さまは、神に栄光を帰そうとする者を必ず豊かに祝福してくださいます。神さまに栄光を帰すための第一のことは、礼拝です。ですから、私たちは今、この礼拝において、神様の祝福を確かなものとされるのです。そしてそれゆえに、私たちには、どんな時にも決して奪われることがない希望が与えられているのです。